

【目的】

洪水時の水位観測に特化した低コストな水位計を開発することで、これまで水位計の無かった河川や地先レベルでのきめ細やかな水位把握が必要な河川への水位計の普及を促進し、水位観測網の充実を図る。

【特徴】

- 長期間メンテナンスフリー（**無給電で5年以上稼働**）
- 省スペース(小型化)（橋梁等へ容易に設置が可能）
- 初期コストの低減
（洪水時のみの水位観測により、機器の小型化や電池及び通信機器等の技術開発によるコスト低減）
（**水位計本体費用は、100万円/台以下**）
- 維持管理コストの低減
（洪水時のみに特化した水位観測によりデータ量を低減し、IoT技術とあわせ**通信コストを縮減**）

開発された水位計の例



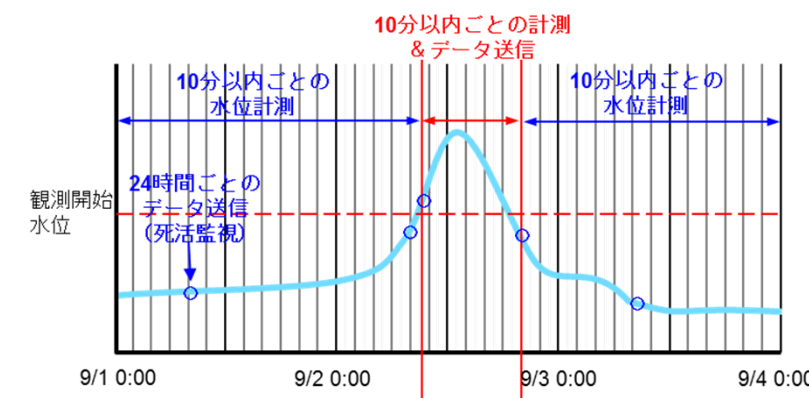
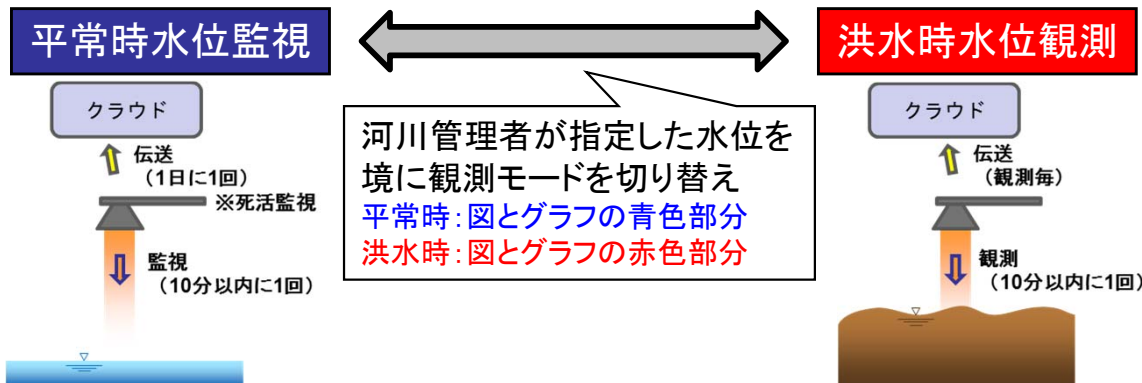
堤防に設置するタイプ
(ケーブル(計測器)を河川に入れて計測)



橋梁に設置するタイプ
(電波や超音波で河川に触れずに計測)

【水位観測方法】

一定の水位を超過した時に観測モードを切り替え、10分以内毎に水位データを送信。水位データはクラウドで閲覧可能。

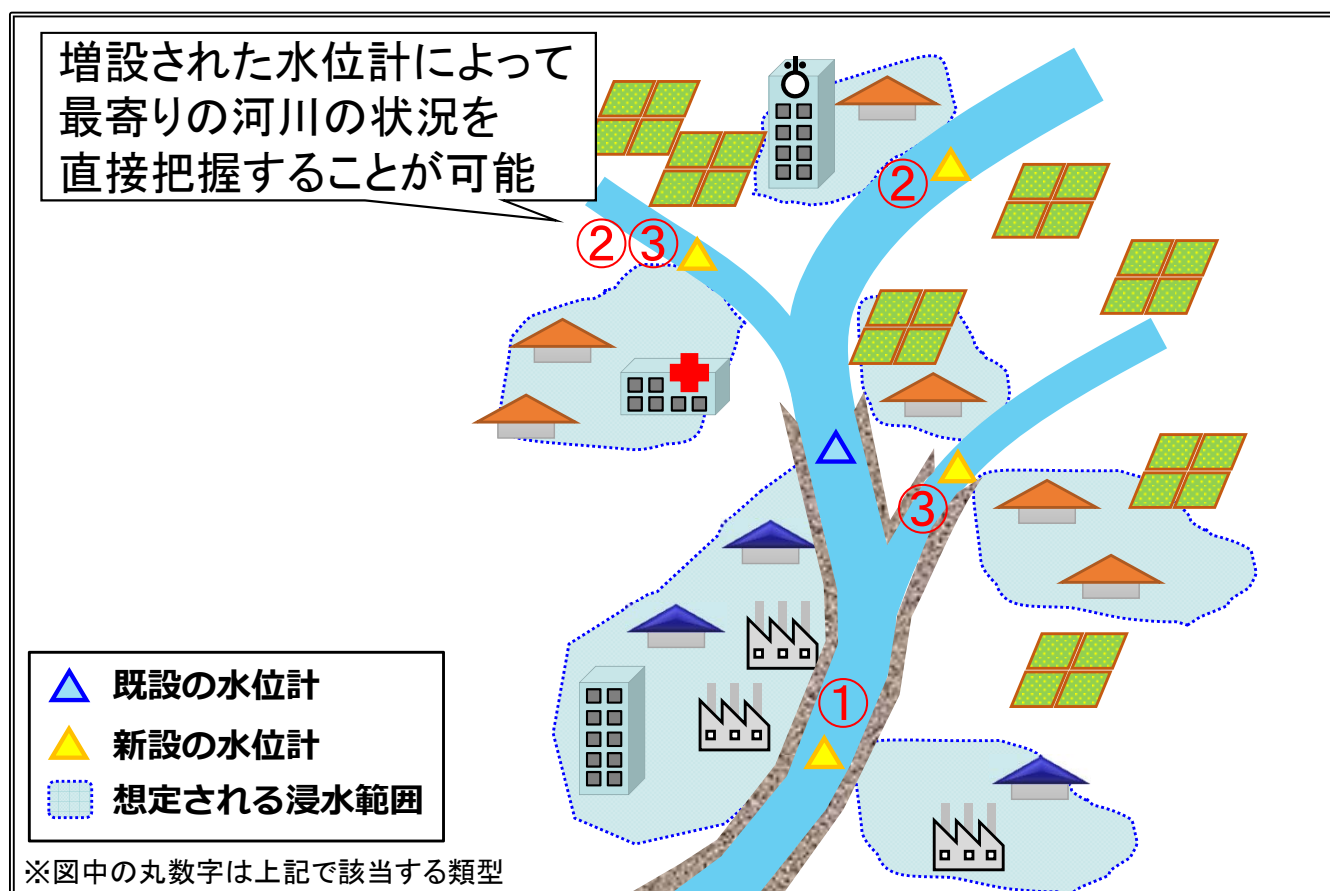


水位監視	10分以内に1回	10分以内に1回	10分以内に1回
データ送信	なし	10分以内に1回	なし
死活監視	1日に1回 ※該当時刻データのみ		1日に1回 ※該当時刻データのみ

これまで各水位計が長い区間を受け持ち、観測所地点の水位から各地点の水位を推定していたが、集落や氾濫ブロック単位で「氾濫の危険度がどの程度切迫しているのか」を直接的には把握できていなかった。

今回は、
①「堤防高さや川幅などから、相対的に氾濫が発生しやすい箇所」
②「氾濫により行政施設・病院等の重要施設が浸水する可能性が高い箇所」
③「支川合流部など、既設水位計だけでは実際の水位が捉えにくい箇所」などを対象として抽出し、既設水位計の配置や現地状況等を踏まえて、危機管理型水位計の配置箇所を選定。国管理河川においては、平成30年度中に水位計の設置を進めることとしている。

※【氾濫ブロック】一連の浸水区域のうち、河川や山などの地形及び構造物等により区分されるひとまとまりの氾濫区域のこと。



中部地方整備局管内 危機管理型水位計 設置予定数

◆周辺より堤防が低いなどで氾濫の危険性が相対的に高い箇所等を中心に設置予定

※設置数は、自治体や地権者・橋梁管理者等との調整の結果、増減することがあります

水系	河川	設置数
安倍川水系		16
	安倍川	13
	藁科川	3
大井川水系		11
	大井川	11
菊川水系		19
	菊川	8
	牛淵川	8
	下小笠川	3
天竜川水系		109
	天竜川	109
豊川水系		18
	豊川	15
	豊川放水路	2
	間川	1
矢作川水系		7
	矢作川	7
庄内川水系		8
	庄内川	8
木曾川水系		44
	木曾川	15
	長良川	6
	揖斐川	14
	牧田川	4
	杭瀬川	2
	根尾川	3
鈴鹿川水系		22
	鈴鹿川	10
	内部川	8
	安楽川	4
雲出川水系		18
	雲出川	11
	雲出古川	2
	中村川	3
	波瀬川	2
櫛田川水系		13
	櫛田川	12
	佐奈川	1
宮川水系		9
	宮川	7
	勢田川	2
整備局管内合計		294